

■今月のメッセージ(2010年12月)

日本銀行富山事務所長
水上 誠一

今年も早12月を迎え、毎年繰り返される反省と、来年こそはという決意が、忘年会のお酒とともに忘れ去られる時期になりました。皆さん、今のうちに反省と決意を書き留めておいた方が賢明ですよ。

さて、私自身の反省と決意は、実は「英語習得」です。留学経験はないので、ちょっと格好をつけて、「若い頃、IMFの研修に参加したことがあります。」などと言ってしまうと、「英語ぺらぺらなんですね。」と言われ、自業自得ながら冷や汗をかくことしきりです。確かに、12週間にわたって、世界中からの参加者と英語でコミュニケーションをし、開発途上国の経済再生プランを英語で作成するという研修は、大変良い経験でした。

ただ、研修終了後は、あっという間に効果は雲散霧消して、日常レベルの会話にも苦労する有様でした。それだけに、日本が如何に英語なしで暮らせる国かに改めて驚き、これが、日本人が英語を習得できない根本原因なのだと思います。よし悪しは別として、例えば北欧のアイスランドでは、翻訳しても採算が合わないために、本は原書で読むのが当たり前、テレビドラマもよくて字幕が付く程度であり、普通の生活を楽しむにも外国語は不可欠です。ベルギーなどの小国でも、英語で道順を聞けば、誰でも教えてくれました。

翻って日本は雇用さえグローバル化の時代です(ある企業の23年度採用は留学生枠が5割)。これからは生きる手段として「最低限英語が使える」ことが不可欠となるでしょう。

それでは、「英語が使える」とはどのレベルなのか。自分のことを棚に上げて、あえて意見を言わせて頂くと、小学校英語も含めて、英語の習得＝英会話という雰囲気があることが気になります。日常使わないのに会話は上達しません。最低限のワンパターンを記憶し、反射的に反応できるようにしておけば、あとは場数を踏むしかありません。

一方、英会話学校に1年間通っても、Financial Times や The Economist から正確に情報を得ることはできないでしょう。米国人の平均語彙は50,000語と言われ、10,000語で英字新聞の90%程度をカバーできるといわれます。ところが、日本の現実をみると、中学生の必須単語が1,000語、大学生が理解できる単語も平均で3,700語に過ぎません。つまり、私を含め日本人が英語をモノにできないのは、悲しいかな、努力が足りないからなのです。小学校でも絵本の音読など、日本人が実は弱い「読み」を強化した方がよいと思います。

龍馬伝や坂の上の雲がブームですが、その格好良さだけでなく、幕末・明治時代にどれだけ苦労して外国の情報を貪欲に吸収したかという観点も見落としてほしくないものです。

最近、大手企業で、社内での英語公用化を宣言する会社が出てきましたが、中小企業では、元々各種文書を翻訳する部署もなく、製品の納期でもグローバルな競争が激しくなる中、市場調査・交渉・調整・会議を世界語である英語で行うのは当たり前という会社も多いのをご存知でしょうか。事実、富山のある元気企業の社長さんは、「うちの社員は勉強家が多くそれに応えてきたつもりだが、『大企業の方が遅れてますね』、と言われて正直うれしかった。」とおっしゃっていました。勉強は大切ですね。